



多肉植物の寄せ植えに魅せられて 色彩や表情の豊かさを伝える

ベジフラふぁーむIPPO 農園主 米山 直美氏

ベジフラふぁーむIPPO（いっぽ、緑区大島）は、主に寄せ植えとして栽培される、セダムやエケベリアといった多肉植物を専門に栽培している農園です。夏の酷暑対策として、山梨県北杜市にも新たなハウスを構え、年間を通じて安定した品質を確保する体制も整えています。今秋には、多肉植物の販売開始から丸3年を迎え、多肉植物の愛好家やコミュニティを支える存在を目指しています。今回は起業のきっかけや多肉植物の魅力などについて、農園主の米山直美さんに聞きました。

■看護師から農家へ転身

米山さんは看護師としての勤務経験があり、コロナ禍でも最前線で働いていました。転機となったのは、「夫の転勤に伴い神戸に3年間滞在

したことです」（米山さん）。現地で初めて有機農業に出会い、看護師としての経験から医薬品よりも食事（野菜）から健康をつくっていくことの大切さを実感し、「好きなこと

を仕事にしよう」と決意。農場での研修を経て、農家に転身しました。

地元の相模原に戻り、農薬や化学肥料を使わない野菜の栽培を始めましたが、事業として成立させる難しさに直面。野菜づくりに悩んでいた頃、趣味で学んでいた多肉植物の寄せ植えの先生から農家でハウス栽培もやっているのなら多肉植物をつくってくれないかと声をかけられ、「野菜から多肉植物へ作物を転換しました」（米山さん）としています。



1 農園のシンボルである寄せ植え作品を描いたTシャツ。アートの「画材」に欠かせない多肉植物の生産に注力する
3 多肉植物がずらりと並び2棟の広大なハウス。酷暑対策として山梨県北杜市にも拠点を構え、安定供給体制を築く



2 丁寧に行われる挿し木の様子。葉挿しなど地道な手作業で着実に苗を増やし、高品質な多肉植物を生産する
4 季節ごとに色鮮やかに変化し、様々な表情を見せる多肉植物。寄せ植え素材の需要は高く、農園での直売も行う



■多肉植物の魅力伝える

多肉植物は色彩が豊かで、形もさまざまです。米山さんは「同じ品種でも、春夏秋冬で色が赤・オレンジ・茶色などに変化し、1年を通じて異なる表情を楽しむことができます」とその魅力を力説します。さらに、寄せ植えに使うことで「まるで絵を描く画材のように、色や形のグラデーションを組み合わせることでアート作品のように仕立てることができるのも魅力です」（米山さん）。

育て方では、1枚の葉から芽が出る「葉挿し」や、茎を切って刺す「挿し木」、株分けなどによって簡単に増やすことができ、育てる楽しみが広がるそうです。日々の生活に追われる中で、土や生き物に触れることがメンタル面の癒やしや、気分転換

につながるといいます。

■安定した供給体制を確立

栽培については、この3年間、試行錯誤が続きました。特に手を焼いたのが、夏の暑さ対策でした。夏の強い日差しは多肉植物にとって「葉焼け（日焼け）」の原因となり、枯れてしまうリスクがあるからです。「暑さに弱い品種は、飛騨高山の方まで苗を持っていったり、夏の間だけ移動させたりしましたが、管理が難しかったです」と語ります。

そこで、今年から山梨県北杜市のビニールハウスでも栽培を始め、苗を移動させなくても夏越しができる生育環境を整えています。

また、販路は寄せ植えの素材（苗）としての卸売りが中心ですが、現在

は需要に対して供給が追いつかない状況。「栽培面積を拡大し、安定した供給体制を整えることが第一の目標です」（米山さん）。

将来は交配によって新たな品種を開発することや、昔からある品種を「かわいく育てる」ことで、その魅力を再発見してもらう情報発信も検討中です。「IPPOの苗が一番」と言ってもらえるような、信頼される素材づくりを目指していきます。

ベジフラふぁーむIPPO

〒252-0135
相模原市緑区大島1514-1
TEL：090-2455-8055
<https://www.vege-ippo.com/about-3>